

## 「目を覚まして祈りなさい」

2015年12月10日

ルカによる福音書 21章 34節～38節。「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罨のようにあなたがたを襲うことになる。その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

それからイエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行って「オリーブ畑」と呼ばれる山で過ごされた。民衆は皆、話を聞こうとして、神殿の境内にいるイエスのもとに朝早くから集まって来た。

ルカ福音書の「小黙示録」は上記の御言葉が最後の段落である。人の子・メシアは雲に乗って来臨し、歴史の終り、終末をもたらす。その前に、様々な混乱と争いが起こるが、臆することなく福音を宣べ伝え、忍耐して、永遠の命を勝ち取りなさいと諭している。混乱と争いに関し、荘厳なエルサレム神殿の崩壊と堅固なエルサレムの町の滅亡を事後予告として、書き加えている。

神による歴史の完成である終末が来る。その時に備えて、どのように生きるべきか。「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい」と忠告している。「心が鈍く」を岩波訳は「鈍重」、フランシスコ会訳は「ふさぎ込む」と訳している。人間がしばしば落ち込む虚無的な心の状態である。これは、放縦や泥酔や思い煩いがもたらすという。終末の日は、不意の罨のように、地上に住む全てに襲いかかってくる。あなた方は、神の裁きから逃れ、人の子・メシアに面と向かって立つことができるように、目を覚まして祈りなさいと言われる。

主イエスは、夜は「オリーブ畑」で過ごされた。オリーブ畑は主イエスの宣教団が休息を取る、いわば、秘密の野营地であったようだ。日中は毎日、神殿の境内で民衆に教え、彼らは喜んで聞き入っていた。人間を肯定する慰めと励ましに溢れた教えであっただろう。神殿当局とは緊迫しながら、受難週を過ごされている。

終末に備え、目を覚まして祈るとはどういうことなのか。主イエスの十字架と復活において、罪を赦され、神と共にあるインマヌエルの救いが全ての人に「既に」与えられている。しかしその救いは、今も苦悩があるから、「未だ」完全なものではない。完全な救いは終末時に与えられる。既に与えられた救いを感謝し、喜ぶ。しかし、未だ完成していない救いが完全なものとして与えられる終末を待ち望む。「既に」と「未だ」の間を生きている。その間、終末に備えて目を覚まして祈るのである。

リアルな終末信仰に生きられた井上良雄先生は下記のように書いている。「人間が本当に人間らしくなること、神に造られた者にふさわしい姿になること。懼れなく、自由に、ユーモアをもって、しかも雄々しく、今日の一日を生きること。一日の苦勞をして一日にて足らしめること。今日の一日を真に現在的に生きること。日々の苦悩に対して、根本的な楽観をもつて、然りと言うこと。世界観や思弁のために生きぬこと。単純に真実を喜び、美を喜ぶものとして生きること。」終末の日を待望し、目を覚ましているとは、このリアリズムを生きることではないか。終末信仰は苦悩に満ちた今を、十字架の死から復活した主イエスの勝利を信じて、大いなる「然り」の中を歩み続けることである。